

主格助詞「が」の意味を学習者にどう教えるか

ヨフコバ四位エレオノラ（神田外語大学）

yov.shi i@eos.ocn.ne.jp

1. はじめに

日本語学習者にとって、「は」と「が」の使い分けは極めて難しい。両助詞が初級の最も早い段階において導入される（たとえば、「は」は、どの教科書（cf. SFJ¹、CMJ²、げんき³）も1課に出てくる文型であり、「が」も、多少の違い（CMJ、L.1；SFJ、L.2；げんき、L.8）はあるものの、初級の前半の極めて早い段階において導入される）ため、当然難しい概念による記述は不可能である。そのため、教師も多くの場合、「は」と「が」の意味記述を避けている。しかし、「が」が導入されると、ほとんどの学習者が2つの助詞の違いについて説明を求めるのが現状である。初級の多くの教科書は、「は」と「が」の意味に関する解説は与えているが、その解説は学習者にとっては必ずしもわかりやすいものとは言えない。

さらに、「は」と「が」の使用を比べると、学習者の発話に「は」の使用が目立つ傾向がある。その背景には、学習者が「が」の意味を十分に理解していないことがある。それは、「が」の意味記述にもつながる問題である。

本稿では、この状況を受け、「が」に焦点を置き、学習にわかりやすい「が」の意味記述の概念を求める。

2. 教科書の記述

まず、教科書にはどんな記述があり、またどんな概念が用いられているか見てみたい。

教科書では、一般的に「が」は「は」との対比において記述される。しかし、記述には非対称性があると指摘できる。たとえば、「は」は一般的に、その機能の側面から、すなわち主題（topic）をマークする助詞であると記述される。一方、「が」は、その統語的役割（「主格」助詞）から記述されることもあれば、意味（「new piece of information」、げんき L.8）から記述されることもある。さらに、「は」は、“comment on a positive aspect”、「が」は“negative aspect”を表すのに用いられるという記述（SFJ、L.10）もあり、その例としては以下の文が挙げられている。

1) 色はいいんですけど、デザインがちょっと。

本稿では、2つの助詞の対比には触れないが、「は」も「が」も主格をマークするということを前提に、主格の「が」の基本的意味について追求したい。

¹Situational Functional Japanese (1991), Tsukuba Language Group. 凡人社.

²A Course in Modern Japanese (2002), 名古屋大学日本語教育研究グループ編. 名古屋大学出版会

³げんき (1999), 坂野永理【ほか著】. The Japan Times.

3. 理論研究での記述

次に理論研究で提案されている概念を少しばかり見ておきたい。

「は」と「が」の研究は歴史が長く、業績も数多くある。ここでは、すべてに触れることができないので、代表的なものだけに言及したい。

従来の多くの研究では、「は」と「が」の意味は、これらの助詞が使われる文の叙述のタイプとの関連において記述される。「は」は、「題示的叙述」また「規定、不可変のもの」(松下 1928/1974)、または「判断の叙述」(佐久間 1940/1983)を表すとされる。一方、「が」は、「無題的叙述」また「未定、可変のもの」(松下 1928/1974)、または「具体的な事実の叙述」(佐久間 1940/1983)を表すとされる。理論研究で提案されているこれらの概念および記述は、日本語教育、特に初級では使用することは不可能であるというのはいままでの間もない。

しかし、理論研究で提案されている概念の中、学習者にとってわかりやすい概念もある。それは、「は」と「が」の意味を文の「情報構造」と関連付ける記述の場合である (cf. 松下 1928/1974、「規定／未定」；黒田 1976、「テーマ／レーマ」；久野 1973、野田 1996、「旧情報／新情報」)。「新情報」という概念は、初級でも応用できる概念だと思われるが、問題となるのは、一見「新情報性」を持たない用法を、この概念を用いて如何に説明付けるかということである。そういった用法としては、例 1) の用法(「その意味には否定的側面がある命題」)および、「眼前描写」、「先行文脈に既出の情報がある命題」、「が」による倒置指定」が挙げられる。本稿では、これらの特殊な用法に着目しながら、「新情報」という概念を用いた意味記述の可能性について探してみたい。

4. 「が」と「情報構造」：久野 (1973) を中心に

まず、久野 (1973) をもとに、「が」は「情報構造」との関連においてどのように記述されているか見てみたい。

久野は、主格をマークする 2 種の「が」を区別する。一つは「総記」(例 2) である。もう一つは「中立叙述」(例 3) である。「総記」の場合は、「が」がマークする名詞句は焦点であり、新情報の担い手である。一方、「中立叙述」の場合は、命題全体が新情報を表している。

2) 太郎が学生です。

3) 雨が降っています。

節 3 で挙げた 4 つの特殊な用法は、「総記」としても「中立叙述」としても分類できない。では、「総記」と「中立叙述」に使われる「が」と特殊な用法の「が」との間に共通点はあるのか。あるとしたら、その共通点とは何か。この問いに答えるために、本稿では、特殊な用法の命題の情報構造を分析したい。その前に、「が」の意味記述に用いる「新情報」という概念の領域を検討してみたい。

5. 新情報とは何か

一般的に、「新情報」は「未知」の情報、すなわち発話の文脈においてまだ存在しない情報と定義される。しかし、久野 (1973:209) が指摘するように、「与えられた構成要素が、その文の中で新しい

インフォメーションを表すか古いインフォメーションを表すかという概念は、その構成要素が指す事物が既に話題にのぼったことがあるか否かという概念 (anaphoricity) とは別のものである。また、Slobin and Aksu (1982:197-198) は、話者の意識が出来事を受け入れるための準備ができていない (unprepared mind) 場合は、その情報がすぐに消化されず、話者がその出来事を距離のある出来事として感知していると述べている。さらに、Akatsuka (1985:632) は、情報の受け止め方は発話時における話者の認識的状态に深く関係していると主張する。また、Akatsuka は、新情報の領域には、通常位置づけられる「未知」の情報以外に、「驚異」や「突然認識」または「否定的信念」といった心的態度を表す情報も位置づけており、日本語は新しく知った情報と知識の状態の認識的区別に関して敏感な言語であると指摘する。

これらの指摘をもとに、本稿では、「新情報」のドメインを、「未知の情報」から「驚き」や「意外性」および話者の「否定的信念」や「突然認識」まで幅広い心的態度を含んでいるドメインとして定義づけ、このように定義し直した「新情報」という概念をもとに、特殊な用法も含んだ「が」の意味を記述したい。

6. 特殊な用法と「新情報性」

6-1. 「眼前描写」

「眼前描写」の例として、一般的に、次のような文が挙げられている。

4) あっ、空が青い。

5) あっ、犬が走っている。

本稿では、それに、6)のようなタイプの命題も加えたい。

6) あっ、財布がない。

「眼前描写」のプロセスは、話者が出来事を目撃しているということを伴っている。話者は、出来事を目撃しているため、出来事の「真実性」を確認できるわけである。ここで問題となるのは、話者が目撃し、その真実を立証できる出来事の描写には、なぜ、通常期待される「は」ではなく、「新情報性」を表す「が」が使われているかということである。言い換えれば、「眼前描写」という用法の「新情報性」とは何かということである。この問いの答えのヒントは、野田 (1996:124) の次の指摘にある。野田は「主題を持たない文」になりやすい文は、その文が表す内容に「意外性」や「驚き」がある文であると主張する。

「眼前描写」のプロセスを次のように考えることができる。まず、話者が目の前の出来事を認識する場合は、その出来事をすぐに認識 (Slobin and Aksu の用語を借りると、「消化」) できない、つまり認識するには時間がかかるため、はじめは出来事を突然認識 (つまり、「新情報」のドメインのもの) として受け止めているのである。また、場合によっては (例6)、話者が突然認識したことが、話者の過去の思い込み (話者が以前思い描いていたこと) に反することもある (たとえば、「あっ、財布がない」と言った時は、「財布があると思っていたが、現において違うことが発覚した」とい含意が伴

っている)。つまり、Akatsuka(1985)が言う「こんなことは今までは知らなかった」(I didn't know this until this moment) または「今知ったことは以前思い描いていた状況とは異なる」という前提が働いているのである。すでに述べたように、「突然認識」や「意外性」といった心的態度は、「新情報」のスケールに位置づけられている。「眼前描写」の命題に現れる「が」の使用は、そういったタイプの新情報性に裏付けられているのである。

6-2. 「先行文脈に既出の情報がある命題」

先行文脈にはすでにその情報がある場合は、その後続の命題には、その情報を指し示すに一般的に「は」が使われる。

7) 先ほどまで強い雨が降っていました。その雨は、今は止み、空もすっかり晴れてきました。

しかし、日本語には、先行文脈の内容を受けている名詞句が「が」にマークされる命題もある。

尾上(1973/2001: 20)は、単文で用いられる「が」の3つの特殊な用法(「選択指定」、「眼前描写」、「問い返し」として指摘する用法の中、「問い返し」という用法がある。尾上は「問い返し」の例として、次の例を挙げている。

8) A: 見ろよ。こんな大きいねずみを取ったぞ。

B: 大きくはないよ。小さいよ。

A: このねずみが小さい  ?

また、尾上(*ibid*)は、「問い返し」を「相手の発言内容の中核的部分を一旦自分の言葉に直して受けとめ、文末のイントネーションとともに相手に投げ返して、驚き、不信などを表すものである」と定義している。尾上が例に挙げているのは対話文であるが、同じような用法の独話文もある。

9) レポーター: 【目撃する前】このお寺の鐘はどうなっているんですか?

【目撃した後】あつ、鐘がドラム缶!⁴(テレビ番組より)

既出の情報を指し示しているにもかかわらず、8)と9)のような命題には、期待される「は」ではなく、「が」が使われているのはいったいなぜであろうか。この問いに答えるためには、少しばかり8)と9)の情報構造を考慮しよう。

8)は、話者の不信(Akatsukaの用語を借りると、「否定的信念」)を表している。一方、9)は、「発見」(思いがけないこと)による話者の驚きを表している。すでに繰り返しで述べたように、「驚き」や「不信」(または「否定的信念」)といった心的態度は「新情報」のスケールに位置づけられている(Akatsuka1985)。そういったタイプの「新情報性」が8)と9)における「が」の使用を正当付けていると言える。

⁴この命題には「眼前描写」の要素もある。

ブルガリア語にも似たような言語状況があるが、文法的手段は違う。ブルガリア語では、話者の未確認の情報、つまり「新情報」(いわゆる evidential) の形式が「不信」を表すのにも用いられる(例 10) (詳しくは、ヨフコバ四位 2003、Yovkova-Shii2004、ヨフコバ四位 2010 を参照)。

10) Malkijat	razpravi,	če	isakal	da	stava
坊や:NOM	言う:AOR 3SG	PTCL	ほしがる:EVID 3SG	ように	なる
muzikant.	Dori	ne	e	dokosval	s prăst
音楽家	さえ	NEG	AUX 3SG	触る:EVID MASC	で 指
piano	a muzikant	štjal	da mi	stava.	
ピアノ	しかし 音楽家	FUT PTCL:EVID MASC	ように	なる	

「坊やは音楽家になりたいんだって。ピアノは触ったこともないのに。音楽家なんかなれるわけがない。」

6-3. 「が」による倒置指定

次に、第 3 の特殊な用法、いわゆる「が」による倒置指定について見てみよう。通常、倒置指定文の主語には「は」が現れるが、天野(1995)が指摘するように、「が」による特殊な倒置指定文が存在する。

11) ところで皆さん、今まで説明した中でもっとも自信があるのが実はこれなんです。

(天野(1995)による例)

例 11) は「指定文」ではなく、「倒置指定文」であるということを立証するために、天野(*op. cit.*) は、[A が QW だと思っ？、B だよ] というテストを行っている。

11) ところで皆さん、今まで説明した中でもっとも自信があるのが [どれだと思っますか] 実はこれなんです。

天野は日本語には 2 種の倒置指定文があることを認めなければならないと主張するが、その違いについては述べていない。

では、「は」による倒置指定文と「が」による倒置指定文は一体何が違うのであろうか。分析に入る前に、少しばかり例を見てみよう。

12) この村で一番若いのが私です。(テレビ番組より)

13) アイスクリームにさらなる進化をもたらしたのが産業革命です。(テレビ番組より)

14) 夏休みに、汐留でいろいろなイベントが開催されています。その中で、もっとも人気なのが「笑点魚釣りゲーム」です。(テレビ、「笑点」より)

まず、天野のテストを用いて、12)～14)は倒置指定文であるのか確認したい。

- 12) この村で一番若いのが【だれだと思えますか】私です。
- 13) アイスクリームにさらなる進化をもたらしたのが【何だと思えますか】産業革命です。
- 14) 夏休みに、汐留でいろいろなイベントが開催されています。その中で、もっとも人気なのが【どれだと思えますか】「笑点魚釣りゲーム」です。

上記のテストが示しているように、12)～14)は、「が」に後続する部分が焦点となっており、すなわち倒置指定文である。では、これらの文に「が」が使われているのは一体何故であろうか。言い換えれば、「は」の倒置指定文とは何が違うのであろうか。

この問いに答えるために、「は」による倒置指定文について少しばかり見てみよう。

- 12') この村で一番若いのは私です。
- 13') アイスクリームにさらなる進化をもたらしたのは産業革命です。
- 14') 夏休みに、汐留でいろいろなイベントが開催されています。その中で、もっとも人気なのは「笑点魚釣りゲーム」です。

主格が「は」によってマークされている文では、「は」に後続する部分（下線の部分）は未知の情報の解説を与えているのみである。すなわち、「一番若いのはだれですか→私です」、「アイスクリームにさらなる進化をもたらしたのは何ですか→産業革命です」、「夏休みに、汐留でいろいろなイベントが開催されています。その中で、もっとも人気なのはどれですか→「笑点魚釣りゲーム」です」ということである。

では、「が」が使われている文は何が違うのだろうか。違いについて論じる前に、12)～14)の意味について考慮したい。まず、12)が派生された発話状況は次の通りである。その命題の話者は自分の村の高齢化（住人は皆 70～80 歳代である）について語り、その中、50 歳代である自分が若いという皮肉も込めた驚きの事実を述べているということである。13)も、その内容から考えると、「アイスクリーム」と「産業革命」の関係が通常考えかねる「意外な関係」であるため、意外性を伴っている。また、14)も、ほかにも人気を集めるゲームがたくさんあるのに、「笑点魚釣りゲーム」が人気であるということが意外であるというニュアンスを帯びている。すなわち、「が」が使われている倒置指定文では、「が」に後続する部分は、未知の情報の解説を与えているのみならず、「が」が示す部分と意外な関係を持つという付加的な意味が加わるということである。

すでに見てきたように、「驚き」と「意外性」は「新情報」の領域に分類されている (Akatsuka1985)。それに従い、上記の 12)～14)に関しても「新情報性」を認めることができる。また、そのタイプの「新情報性」こそが「が」の使用を正当付ける要因であり、主格に「は」が使われている同様の命題と区

別させているものであると考える。ヨフコバ四位(2008)で述べているように、日本語には2種の倒置指定文が存在するのは、「驚き」や「意外性」という意味を伴っている文とそうでない文を区別させる必要があるためである。

「が」による倒置指定文が「驚異」や「意外性」という意味を含んでいるということは、「が」による倒置指定文の述部には「発見性を強調する」(用語は森本(1994)による)副詞(例えば、「なんと」や天野の例にある「実は」)がしばしば使われるということによっても裏付けられているのである。

15) 楽天トラベルがほこるプラチナコレクションホテルのお部屋がなんと、お1人様あたり4250円～。
(楽天ホームページ(2008)より)

12)~14)にもこの副詞を使うと、「意外性」の意味はより明確となる。

12) この村で一番若いのがなんと私です。

13) アイスクリームにさらなる進化をもたらしたのがなんと産業革命です。

14) 夏休みに、汐留でいろいろなイベントが開催されています。その中で、もっとも人気なのがなんと「笑点魚釣りゲーム」です。

6-4. 「否定的側面」

最後に例1)および以下の例16)にあるような、「否定的側面」の表示に用いられる「が」について考慮したい。

16) 顔は浮かぶのに、名前が浮かばない。

1)と16)は対比の文である。しかしながら、対比される前件(「色はいい」、「顔は浮かぶ」)と後件(「デザインがよくない」、「名前が浮かばない」)の主格はそれぞれ「は」と「が」によってマークされており、非対称性を示す。この非対称性は何を意味するのであろうか。簡単に言えば、前件と後件の情報の受け止め方は話者にとって異なるということである。では、「が」の命題の情報は話者にとってどんな情報であらうか。すでに、節2の例1)で見たように、「が」の命題は「否定的側面」を表しているとして記述されている。「否定的側面」は、言い換えると、話者にとって受け入れ難い側面である。つまり、話者の「情報の縄張り」の外にあるものであり、話者との距離のある情報であると言ってよい。話者の情報の縄張りの外にある情報は、通常話者の認識には同化されていない情報、すなわち「新情報」である。1)と16)の後件に「が」が使われるのはこのようなタイプの「新情報性」のためである。

7. おわりに

ここまでの考察から、「が」の意味記述には「新情報」という概念が有効であるということが言える。ただ、「が」のあらゆる用法を包括的に記述できるためには、予め「新情報」の領域を設定してお

く必要がある。

筆者は、日本語の理解力が高めの中級前半の学習を対象に、本稿で論じたような内容を使い、「が」の解説を行った。その結果、「が」の意味・用法が容易に理解され、また「は」との違いが十分に把握された。ただ、現段階では、この試みは解説に終わり、学習者の運用力を確認できるデータはまだ収集していない。データ収集およびその分析は今後の課題にしたい。

また、今回は中級の学習者を対象に解説を行ったため、日本語能力が高い中級以上のレベルの学習者には、本稿で提案している「が」の記述方法および概念は応用できると考える。課題として残るのは初級の学習者には如何なる手段を使って、概念の導入をするかということである。一つ言えることは、「新情報」という概念は初級の学習者にとっても馴染み深い概念であるため、用いることができる。また、初級で一般的に産出される命題が、「総記」と「中立叙述」の「が」を含んだ命題に限るので、「新情報」という概念の意味は、「だれが、なにが・・・」（「総記の場合」と「どうなっているか」（「中立叙述」の場合）のように簡単に説明できる。

このように、「が」の意味記述には、「新情報」という概念を有効な概念として提案したい。

参照文献

- 天野みどり(1995)「「が」による倒置指定文」『人文科学研究』88, 1-21.
- 尾上圭介(1973/2001)「文核と結文の枠—「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」『文法と意味』I, 15-49, くろしお出版, 東京.
- 久野暲(1973)『日本文法研究』, 大修館書店, 東京.
- 黒田成幸(1976)「日本語の論理・思考」『岩波講座日本語1』, 139-176, 岩波書店, 東京.
- 佐久間鼎(1940/1983)『現代日本語法の研究』, くろしお出版, 東京.
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』, くろしお出版, 東京.
- 松下大三郎(1928/1974)『改撰標準日本語文法』, 勉誠社, 東京野田尚史(1996)『「は」と「が」』, くろしお出版, 東京.
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版, 東京.
- ヨフコバ四位エレオノラ(2003)『ブルガリア語の / 分詞の語用論的研究—いわゆる Evidential のカテゴリーに関連して』博士論文, 東京大学.
- ヨフコバ四位エレオノラ(2008)「助詞「が」の二つの特殊な用法をめぐって」『多摩留学生教育研究論集』6, 1-9.
- ヨフコバ四位エレオノラ(2010)「情報構造と文法形式の働き」『東京大学言語学論集』29, 335-346.
- Akatsuka, Noriko(1985) "Conditionals and the epistemic scale." *Language* 61-3, 625-639 .
- Slobin, Dan and Ayhan Aksu(1982) "Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential." *Tense-aspect: between semantics and pragmatics*, ed. by Paul Hopper, 185-200, John Benjamins : Amsterdam.
- Yovkova-Shii, Eleonora(2004) "Evidentiality and admirativity : semantic-functional aspects of the Bulgarian /-participle." 『言語研究』126, 1-38.